

緑豊かな森林の再生をめざして

ボランティアによる長野県西部地震跡地の復旧



国民の森林・国有林

中部森林管理局 木曽森林環境保全ふれあいセンター

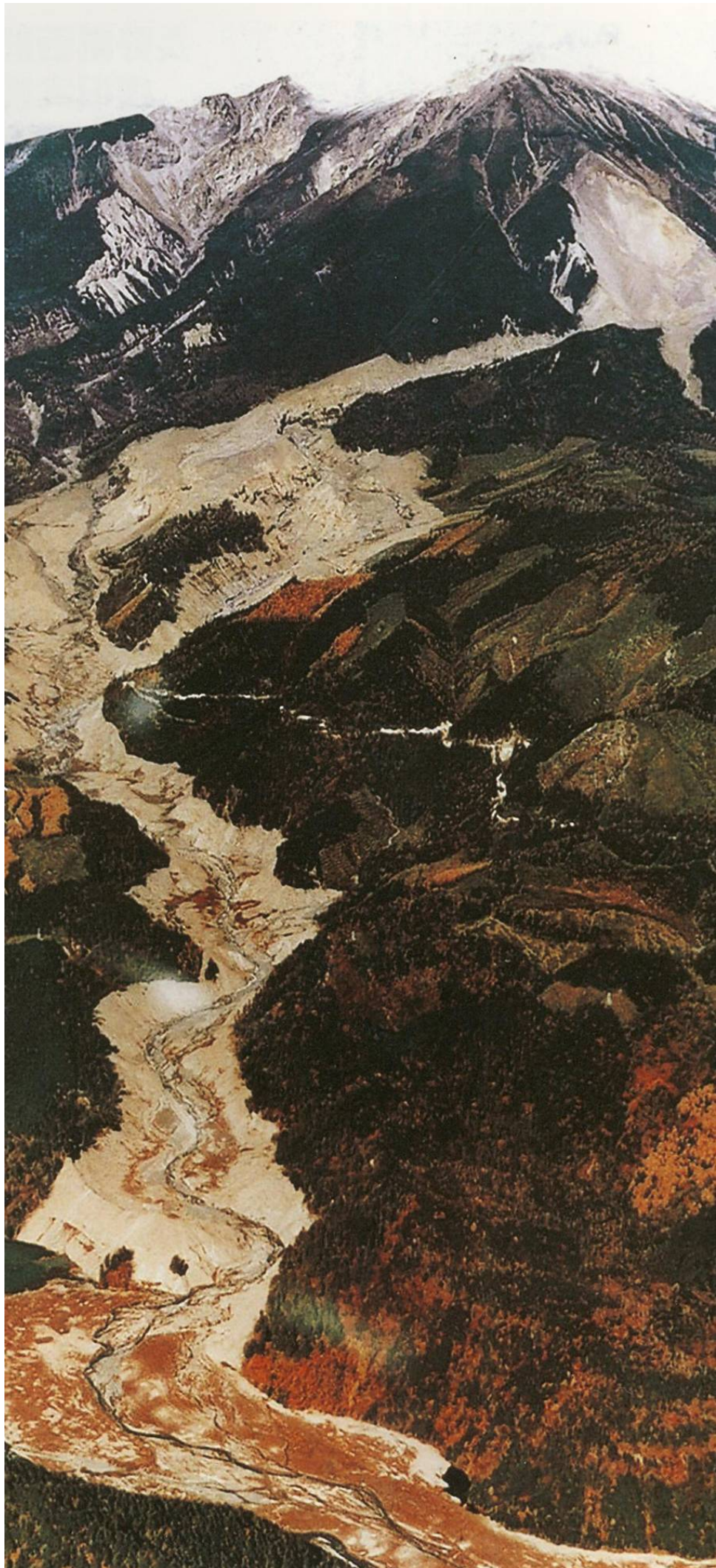
目次

森林の再生とボランティア活動 中部森林管理局長 小椋 直幸・・1	
復旧に向けた森林の再生・・・・・2	
ボランティアによる 様々な活動・・・・・5	
未来世紀へつなぐ緑のバトン・・・・・11	
子供たちによる 上下流の交流・・・・・14	
節目の年を迎えて・・・・・17	

表紙写真：かりがね緑の少年団による植樹の様様(H17)

写真右：長野県西部地震直後の被災地(S59)

裏表紙写真：王滝村うぐい川の溪畔林



森林の再生とボランティア活動

中部森林管理局長 小禄 直幸



昭和59年9月14日午前8時48分、木曽の御岳山一帯を襲った長野県西部地震では、大小さまざまな山腹崩壊等が発生し、その被害は、木曽郡王滝村を中心に県西部14市町村に及び、各所で発生した土石流や地すべりにより死者・行方不明者29名を出す大災害となりました。なかでも御岳山南西斜面で発生した大崩壊は、面積44ha、土砂量3,600万 m^3 の崩壊土砂が一気に土石流となって流域の山腹を削りながら流下し、伝上川をはじめとする濁沢・濁川流域の国有林等に約600haの荒廃地を出現させました。

長野営林局(現中部森林管理局)では、ただちに「災害対策本部」を設置し、二次災害防止の観点から、土石流の流出を食い止めるための山腹工、溪間工をはじめとする治山災害復旧計画を立案し、建設省(現国土交通省)や県、村などとの連携の下、復旧事業を開始しました。

こうした土木工事による災害復旧は、30年後の現在も行われているところですが、このような工事と平行して人々の善意に基づく緑化活動も早くから進められてきました。災害の翌年、国際森林年にちなんだ「若い力で御岳を緑に」を合い言葉とするイベントが王滝村で開催され、多くの若者がボランティアとして集まり、土石流が溜まって出現した褐色の大地に有機物が入れられ、土地を肥やすヤシャブシ、ハンノキ類が植えられました。また、中日新聞社の記念事業で集められた募金による緑化事業も行われ、平成8年には「緑のバトン」と呼ばれるボランティア作業も始まりました。その後、王滝村で拾ったドングリを持ち帰り、それを育てた苗木を再び王滝村の国有林に植える活動も行われるようになり、当初「木が育つのに百年かかる」と言われた褐色の大地は、見事な緑の林に生まれ変わりました。関係された皆様に心から厚く感謝を申し上げる次第です。

これらの林を地震前の森に育てるためには、これからも除間伐等多くの手入れが必要になると考えられます。そのため、中部森林管理局では、木曽森林環境保全ふれあいセンター等によるボランティア活動への支援を、これまで以上に積極的に行い、国有林の自然再生を進めていく所存であります。皆様方には今後とも末長いご協力を賜りますようお願い申し上げます。



長野県西部地震災害箇所

被災直後の伝上川・濁沢合流下付近(S59)

御岳崩れの土石流の一部が伝上川に流れ、浸食深9m、土砂量137万 m^3 を浸食した

復旧に向けた森林の再生

○「国民の森」の造成

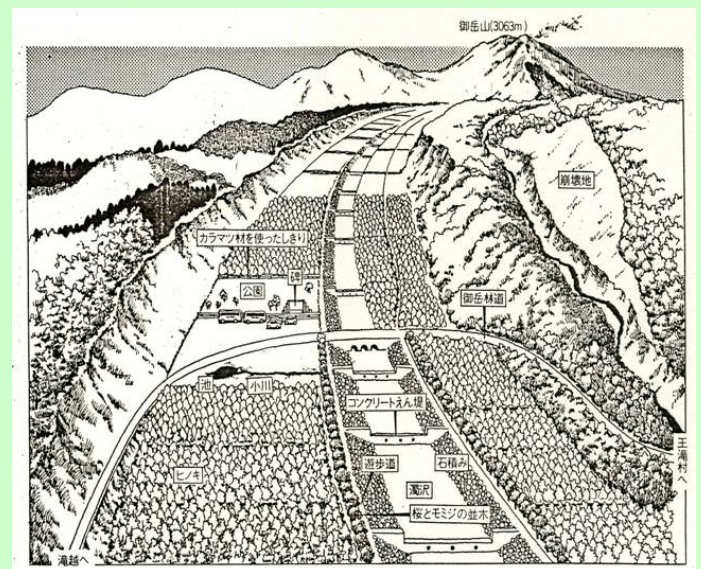
「国民の森」の造成は、長野県西部地震(昭和59年9月)に伴う大崩壊によって発生した多量の土石流が濁川を埋め尽くした跡地に、昭和62年中日新聞社が創業百周年の記念事業として行った募金を基に進められました。この「国民の森」は、国民が緑と水を守り、治山治水、森林・林業への意識を高め、潤いある美しい国土造りの推進を願って設定されたもので、面積は約17haです。

現在、「国民の森」一帯は、森を育ててきた養分のある土が流され、岩石や砂利が堆積し、水はけが悪く木が育つには不向きな土地となっています。このまま自然の推移に委ねた場合、以前のような森に回復するには長い年月がかかると考えられています。

一般的な造林地では土壌構造が発達していますから、伐採した跡地にはヒノキやカラマツなどを植えるのが普通ですが、「国民の森」では、「土壌作り」が平行して行われています。痩せ地でも育つヤマハンノキ、ヤシャブシ等が植えられ、落葉等が肥料となり豊かな森林土壌を作るよう肥料木として育てられています。そして肥料木の間に、ヒノキ・サワラ・ミズナラ等も同時に植えられました。現在、その肥料木は樹高約10m位にまで育ち、成長が遅いヒノキやミズナラ等の生育が阻害され始めています。このことから、最近ではボランティア活動により、肥料木を少し伐採し、地面まで光を入れる作業が積極的に行われています。



造成直後の「国民の森」の様子(S61)



「国民の森」の完成予想図(S62年時点)



木曽郡身体障害者福祉協会連合会の人たちによる植樹(S61)



平成17年現在の「国民の森」



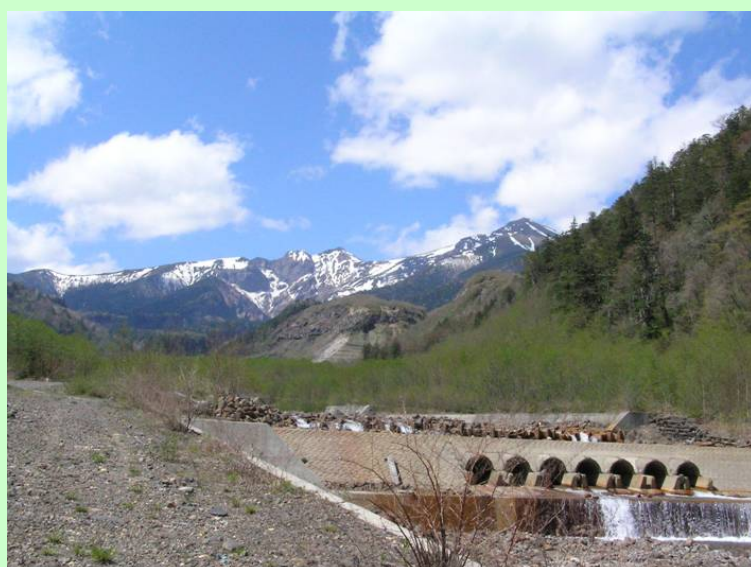
高校生による「国民の森」でのボランティア活動(H16)



「国民の森」の記念碑をバックに(H16)



木曾山林高校生の協力による植生調査の実施(H17)



「国民の森」から見た御岳(H17)

〇復旧に立ち上がる若い力

国際森林年記念行事の一環として、「長野県西部地震被害跡地に緑化体験の集い」が、昭和60年8月6日から3日間、王滝営林署管内で行われ、県内外から募集した若いボランティア42名（高校生21名、大学生18名、社会人3人）と共催者の王滝村、営林局署関係者ら80余名が参加して実施されました。

くりそら

ボランティア代表として、地元王滝村の栗空さんから「若者が植樹に参加できる機会が少なく、今回は良い機会だと思い参加しました。今年は国際森林年でもあります。情熱と若さで被災地を緑にするように頑張ります」との力強い挨拶がありました。

伝上川、濁川合流地点の植樹場所と災害地が一望できる地点で、災害時の説明をすると、あまりの災害の大きさに、参加者は「想像以上だ」と異口同音に驚嘆していました。



「長野県西部地震被害跡地に緑化体験の集い」に参加したボランティア活動の様子(S60)

ボランティアによる様々な活動

〇再生に向けたボランティア活動の歩み

実施年月	主な活動内容等
S60. 8	中部森林管理局、王滝村の呼びかけにより県内外から応募したボランティアによる植林作業を実施
S62. 5	中部森林管理局、中日新聞社が共同で「国民の森」を造成、植林作業を実施
H8. 7	中日森友隊結成
H8. 8	中日森友隊が初めての除伐作業を実施
H9. 8	中日森友隊が植林、除伐作業を実施 愛知県立阿久比高校が植林作業を実施
H9. 10	中日森友隊が除伐作業を実施
H10. 5	愛知県立阿久比高校が植林作業を実施
H10. 8	愛知県立阿久比高校が除伐作業を実施
H11. 8	愛知県立阿久比高校が除伐作業を実施
H12. 8	愛知県立阿久比高校が除伐作業を実施
H12. 9	中部森林管理局、王滝村、三岳村、中日新聞社、中部日本治山治水連盟、水資源開発公団（現（独）水資源機構）が「未来世紀へつなぐ 緑のバトン」実行委員会を設置
H12. 10	中日森友隊が植林、除伐作業を実施
H13. 5	第1回「未来世紀へつなぐ緑のバトン植樹祭」開催、中日森友隊などが植林作業を実施
H13. 10	「未来世紀へつなぐ緑のバトンどんぐり拾い」開催、中日森友隊などがどんぐり拾い、除伐作業を実施
H14. 5	第2回「未来世紀へつなぐ緑のバトン植樹祭」開催、中日森友隊などが植林作業を実施
H14. 8	愛知県立阿久比高校が除伐作業を実施
H14. 10	「未来世紀へつなぐ緑のバトンどんぐり拾い」開催、中日森友隊などがどんぐり拾い、除伐作業を実施
H15. 5	第3回「未来世紀へつなぐ緑のバトン植樹祭」開催、中日森友隊などが植林作業を実施
H15. 8	愛知県立阿久比高校が除伐作業を実施
H15. 10	「未来世紀へつなぐ緑のバトンどんぐり拾い」開催、中日森友隊などがどんぐり拾い、除伐作業を実施
H15. 11	名古屋シニアライオンズクラブが「ネイチャースクール in 木曽」を開催、モンゴル、中国からの留学生らとともに除伐作業などを実施
H16. 4	木曽森林環境保全ふれあいセンター設立
H16. 5	第4回「未来世紀へつなぐ緑のバトン植樹祭」開催、中日森友隊などが植林作業を実施
H16. 8	愛知県立阿久比高校が除伐作業を実施
H16. 10	木曽森林環境保全ふれあいセンターが「国民の森」において植生の状況調査を実施 「未来世紀へつなぐ緑のバトンどんぐり拾い」開催、同時に中部森林管理局主催による「西部地震20周年記念式典」開催、感謝状の贈呈等を実施
H17. 5	第5回「未来世紀へつなぐ緑のバトン植樹祭」開催、中日森友隊などが植林作業を実施
H17. 8	愛知県立阿久比高校が除伐作業を実施
H17. 10	「未来世紀へつなぐ緑のバトンどんぐり拾い」開催、中日森友隊などがどんぐり拾い、除伐作業を実施

○中日森友隊による活動

中日新聞社の全面的な協力のもとで「国民の森」が造成された後、同社の社員、家族のほか一般からの参加者も加え、平成8年7月、中日森友隊が結成されました。

同隊では、同年8月に王滝村などとの共催で「グリーンカレッジ in 国民の森」を開催し、以来10年間にわたって「国民の森」や王滝村有林などを中心に、下草刈り、枝打ち、除伐、間伐などを実施しています。会員数は愛知県など7県で1,455人(2006年3月現在)を数え、育林作業や森林散策などを通じて、森林、自然について学び、遊び、楽しみながら緑を育て、森に親しんでいくことを目的としたボランティア活動を続けています。



グリーンカレッジ in 国民の森(H8)

“森づくり”体験

グリーンカレッジ in 国民の森林 王滝村などで開催

緑に親しみながら森の大切さを学ぶ「グリーンカレッジin王滝国民の森」(中日新聞本社など共催)が10日、長野県木曽郡王滝村と岐阜県恵那郡加子母村の国民の森を舞台に、1泊2日の日程で始まった。

中日新聞創業110周年事業。7月に発足した「中日森友隊」の隊員96人が参加し、初日は緑化工事体験などに汗を流した。

国民の森は、昭和59年の長野県西部地震による土石流で崩壊した王滝村の被災地と、隣接する加子母村に緑をよみがえらせようと、62年に造成された。

王滝村で開会式の後、土石流の怖さや治山事業の大切さを西部地震被災地を見て実感。緑化工事体験として、芝やコスモスなどの種が入った植生シートを張って花壇づくりに挑戦した。

(平成8年8月11日 中日新聞より)



グリーンカレッジ in 国民の森 (H9)



緑豊かな森を育てよう

中日森友隊員が下草刈り

育林作業を通じて緑化の大切さを学ぼうと長野県王滝村で行われていた「グリーンカレッジin王滝国民の森」(同村、中日新聞本社など共催)の最終日10日、参加者らはヒノキの植栽地の中で下草刈りと間伐に汗を流した。

この催しは、昭和59年の長野県西部地震による土石流の被災地に緑をよみがえらせるのが狙い。一般から募集した中部各県の子供からお年寄りまで百人が「中日森友隊」として参加し、1泊2日の日程でキャンプをしながら緑化作業に取り組んだ。

最終日は、あいにくの強い雨となったが鎌を手にした参加者らは大張り切り。地元の王滝署の職員らから作業の手順を教わりながら、ヒノキの周囲に生えた雑草をきれいに刈り取った。現場は標高千メートル近くとあって、高山特有の植物も多く、参加者どうしで「これは何?」と名前を教え合う光景もあった。

この後、参加者らは近くの温泉に入ったり木工細工を楽しんだり。「雨で作業は大変だったけれど、それだけに緑を守ることの難しさを感じた。何年後に、自分たちが作業したところの樹木がどれだけ生長しているか見に来たい。」と話す人もいた。

グリーンカレッジは、10月中旬に岐阜県加子母村でも行われる。

(平成9年8月12日 中日新聞より)



「国民の森」でのボランティア活動 (H14)

○愛知県立阿久比高校による活動

愛知県の阿久比高校では、地域に貢献する様々なボランティア活動を行っていますが、平成9年度、同校創立20周年記念の活動として、水源地の森林保全に役立つようにと育林ボランティアを計画し、以来毎年、同校の生徒が「国民の森」で除伐等の作業を実施しています。活動への参加は自由ですが、例年大勢の生徒が作業に参加しており、中には3年間続けて来てくれる熱心な生徒さんもいるほどです。今年で9年目を迎えるこの活動への参加者は延べ730名に達しています。



職員による説明を熱心に聞く生徒たち(H12)



慣れた手つきで鋸を使う生徒(H16)



平成17年度の作業は、8月9日、生徒72名と先生5名の参加で実施されました。バス2台に分乗して片道約4時間の道のりを移動し、3時間程度の作業を行った後、阿久比町まで帰るというハードなスケジュールのもとで行われた作業でしたが、参加した生徒たちは疲れの色も見せず、一生懸命に取り組んでいました。

作業を行う「国民の森」は、震災後、ヒノキ、サワラ、ミズナラ、カンバ、ヤマハンノキ等による植生復元が進められているところですが、今回の作業では、ヒノキやミズナラが大きく育つことが出来るように、高さが10mを超えるほどに育ったヤマハンノキなどを除伐を行いました。

作業が初めてという生徒たちにとっては、鋸の使い方がかなり難しいようでしたが、中には今年で2年目、3年目の参加者もあり、慣れた手つきで木を切り倒す姿も多く見られました。生徒たちに感想を聞いてみると、「高校生活の中で一番印象に残る体験ができた。この経験をこれから糧としたい」などと答えてくれました。



平成17年度のボランティア活動の様子

私の通っている阿久比高校では、ボランティア活動が盛んです。長野県西部地震で大きな被害を受けた、木曽郡王滝村で、雑木の除伐のボランティア活動を10年程前から行っています。実は、私は友達にこのボランティア活動に参加することを誘われ、軽い気持ちで参加したのです。阿久比町からバスで揺られること4時間余り。木曽川を上るに従い、車窓の景色は緑の濃さを増してきます。王滝村は地震が起きた所とは思えないほど、山も川もきれいでした。

私たちがすることは、ヒノキやサワラの木を大きく丈夫に育てるために、まわりの邪魔なヤマハンノキなどの木を切ることでした。それは、ヤマハンノキは生長が早く、当初は緑の保全に有効だったのですが、今は逆に太陽の光をさえぎってしまうからです。木を育てることは、木に人間が出す二酸化炭素を吸って、酸素を出してもらうことと、山をまた崩れさせないためにすることだと、私は思います。

私たちは、2人1組になって、現地のスタッフの方に木の切り方を教えてもらい、のこぎりで木を切りました。最初はなかなか上手に切れませんでしたが、何本か切っているうちに、コツをつかみ、徐々に上手に早く切れるようになっていました。最後には、たくさん切ったので疲れ、腕も痛くなりました。しかし、私が木を切ることで、森林が少しでも元に戻るならうれしいと思い、がんばりました。

このボランティア活動を通して、木を大きく育てるのは、大変な手間と時間がかかるということを知りました。また、地震直後の赤茶けた山肌の写真を見て、山やたくさんの木を破壊してしまう自然の力の恐ろしさを知りました。私達の住んでいる愛知県でも、最近地震が立て続けに起き、東南海・東海地震への不安が叫ばれています。長野県西部地震のように大きな被害が出ると大変だと思います。しかも、環境が破壊されると、生態系も崩れてしまうので、被害が少なくて済むよう日頃の備えをしておくことが大切だと思います。

私は、最初にただ友達に誘われて、このボランティア活動に参加し、環境問題にもほとんど興味がありませんでした。しかし、このボランティア活動を実際に体験し、いろいろなことが見えてきました。今は本当によかったと思います。これからは、環境問題についていろいろ調べ、自分に何ができるか、問いかけていきたい。今回は、本当に貴重な体験ができました。これからもこのボランティア活動が続いて、山や森が元の姿に戻るための力添えができればいいなと思います。来年は、ぜひ自ら参加したいと思います。



作業の合間の一コマ(H15)



先生も一緒にポーズ(H16)

○名古屋シニアライオンズクラブによる活動

名古屋シニアライオンズクラブは、80年以上にわたり世界各地で社会奉仕活動を行っているライオンズ国際協会の単位組織として、名古屋瑞穂ライオンズクラブが設立30年を迎えたことを記念して発足しました。同クラブでは、平成11年3月の発足以来、環境保全のための様々な取り組みを行っており、現在も「会員の豊富な社会経験を生かし、心豊かな行動をとれる奉仕を行う」ことをモットーに、汗と感動を生む活動を展開しています。平成15年に実施した「ネイチャースクール・IN・木曽」には、海外からの留学生も多数参加しました。



ネイチャースクール・IN・木曽(H15)

自然を守るすばらしさを体感 ～モンゴルからの留学生の感想～

シニアクラブの方々とともに「ネイチャースクール・IN・木曽」に参加しました。

とてもいい天气で自然がきれいだし、静かないい所で、気持ちがよかった。

バスの中でいろんな国の留学生とシニアクラブの方々が自己紹介したり、国について話をしたり、歌を歌ったり、自然を見たりして大変楽しく、アツという間に木曽につきました。森林管理署の署長さんから「環境と森林」の講義を受け、大学とは、違う何か気持ちがいい、新鮮な感じを受けました。「国民の森」という人工林で、小さなヒノキの成育に大切な光を遮っているハンノキを除伐しました。

日本人が自然を大切に守っているのは本当にすばらしいと思いました。モンゴルでは、社会主義の時代、ボランティアで町をみんなで掃除したり、木を植えたり、遊び場所を作ったりして、社会に役立つことをしていました。

国に帰ったら人工林を作る運動を始めたい。そして、20年後には、自分たちにも信じられない程大きな森林になり、立派に蘇った母なる地球に、次の世代の人たちから感謝されることになるでしょう。



緑のバトン植樹祭に参加した会員たち(H16)

未来世紀へつなぐ緑のバトン

ボランティアによる活動が進む中、王滝村をはじめとした関係団体の協力のもと、活動をより広域的に展開させるとともに、西部地震災害跡地の森林の再生及び愛知用水の水瓶である牧尾ダムの水源地の造成、さらにそれらを未来につなげていくことを目的として、「未来へつなぐ緑のバトン植樹祭」が平成13年度より毎年開催されています。さらに、秋には「緑のバトンどんぐり拾い」も並行して行われており、秋に拾ったどんぐりから育てた苗木を、参加者自身の手で次の植樹祭の際に植林するという活動が続けられています。

この活動により、木曽川流域の人々が上下流の隔てなく力を合わせてどんぐりの森を育て、森林・林業への理解を深めるとともに、自然との共生を目指した「人と自然」、「人と人」の交流の輪がさらに大きく広がっていくことが期待されています。

緑のバトン “春の植樹祭”



一生懸命植樹を行う参加者たち (H17)



シイタケの駒打ち体験(H13)



早春の御岳を望みながらの作業(H17)



子供たちと一緒に記念撮影(H13)



作業の疲れを癒す豚汁サービス(H17)



林内に光を入れるための除伐作業(H17)



落ち葉などを利用した土づくり(H17)



冠雪した御岳をバックにして記念撮影(H17)



ドングリを持ち帰る子供たち(H16)



棒パンづくりにもチャレンジ(H16)

私は、5月28日土曜日に未来世紀につなぐ、緑のバトン植樹祭に行くために長野県にある王滝村にいきました。

私は王滝村に行く途中のバスの中で王滝村で起きた地震のことや、牧尾ダム、愛知用水のことを知りました。王滝村で起きた地震は、マグニチュード6.8という地震でした。

この地震のせいで、御岳山八合目のところから山が崩れてしまいました。土砂が、王滝村を襲いました。この土砂が牧尾ダムの方まで流れてきてダムに土砂がたまってしまいました。今、牧尾ダムでは、土砂を取り除く作業をしています。

今、牧尾ダムでは、雨が降らず、ダムに水がたまらなくて困っています。ですので、牧尾ダムでは、節水を呼びかけています。愛知用水は、知多半島には、大きな川もなく、雨もあまり降らないので、人々が困っていました。愛知用水は、人々が水不足で困らないように作ったものです。

私は、未来世紀につなぐ、緑のバトン植樹祭会場に行ってミズナラの木を植えました。ミズナラとは、ドングリのなる木です。真子と結花里と一緒に植えました。

植える時は、鍬で穴を掘ります。私たちが、選んだ場所は、運悪く、大きな石がいっぱいありました。大きな石は藤田先生でもとれませんでした。

私たちは、大きな石を掘るのは、あきらめて、違う方向で穴を掘っていました。そうしたら、また、大きな石がありました。しかたなく、最初に見つけた大きな石をどかそうとしていると、おじさんがきて、大きな石をどかしてくれました。

そして、ほれた穴に土壌改良材を敷いて、ミズナラの木を植え、上には、土壌改良材と土を混ぜて土をミズナラにかけて、足でミズナラの周りを踏みました。そして、目印に出てきた大きな石を置きました。

私は、未来世紀につなぐ緑のバトンの植樹祭やバスの中でいろいろな事を学んでとても勉強になりました。ミズナラの木を植えるときは大変だったけど良かったです。そして、私たちが植えたミズナラの木がちゃんと育ってくれるといいなと思いました。



緑のバトン植樹祭の様子(H17)

七月に結成され、一九九六年
中に結成され、「緑を育
てて夢に咲く」をテーマに
活動中。中部地方の国や有
名な下草取り、開花後の自
然林作業を継続したい。
育林観察、ネチーチャー
ムなどを行っている。議員
広さは一六・五畝。九〇
年秋までにヤハシノキ、
スナナヒ、ヒナンド千種
類の本植樹、針葉樹が八万
五千本植樹された。
現在、ヤハシノキは約
七割は九割生きた。中
部の小児科生が七十四
歳までが参加。事務局は中
日新聞社会事業部、イン
ターネット社会事業部、イ
ンターネット社会事業部、
アドレスは：<http://www.wachindachi.co.jp/eve>
at/shinyuu.hn。
樹君（もも）三男、生誕九
人、松岡に玉溝村から
送られてきたドンクリを植
え付けた。
庭（い）横一（い）はの大
きさの花は、「どんぐらッ
開いた」。
川（い）の源流地・長野県上村
町で「自然教育」を開講。植
林や炭焼きをしている。
「安城市は、矢作川に引
いた明用池のおおけで盛
いた。」「水を使者が水

かりがね小学校と王滝小学校の交流

平成14年には王滝小学校の「緑の少年団」が、愛知県刈谷市のかりがね小学校の「緑の少年団」が3年間丹誠込めて育てたミズナラの苗木を災害跡地に植林しました。ドングリが結ぶ縁で、翌15年には王滝小学校の6年生が、かりがね小学校へ定植を終えた苗木の様子や、森に対する思いを発信するための手紙を出しています。

このやりとりをきっかけに当時担任だった堀先生は、学校周辺の緑をテーマとして国語科の学習に取り組んだそうです。この中で、子供たちは相手にわかりやすく、より詳しく書き伝えるために推敲や書き足し・削り取りなどに、いつも以上の熱意を持って取り組んでくれたとのことでした。



手紙を手にする王滝小の生徒たち(H15)



ミズナラを送り出すかりがね小の生徒たち(H14)



両校の生徒による記念写真(H14)



かりがね小…3年間大事に育ててきました。よろしくお願いします。
王滝小…ありがとうございました。頑張つて育てます。

ミズナラの苗木の受け渡し(H14)

安城西中学校の活動

愛知県安城市の安城西中学校では、水の大切さを学ぶための総合学習の一環として、生徒9人が校庭の隅でドングリから立派な苗木を育て、王滝村まで植えに来てくれました。



王滝村に苗木を送る生徒たち(H13)



王滝村での植樹風景(H13)

〇水源の森の再生へ向けて

(独)水資源機構の牧尾ダムは、中部圏の水瓶として重要な役割を果たしていますが、長野県西部地震に伴う土石流で大量の土石が流入し、ダムの推砂が大きな問題となりました。このため、同機構では、地震災害跡地における緑化活動を実施しています。現地には、上下流双方の小学生の手によってブナやミズナラなど様々な樹木が植えられました。この子供たちが大きくなる頃には、樹木も大きく育ち、豊かな水を育む立派な水源の森となっていることでしょう。



牧尾ダム事務所で説明を受ける子供たち(H17)



上下流交流による記念植樹(H17)

節目の年を迎えて

平成16年10月24日、王滝村銀河村キャンプ場において、長野県西部地震20周年記念式典が「未来世紀へつなぐ緑のバトンどんぐり拾い」(主催王滝村、中日新聞社など)とのジョイントの形で開催され、災害直後から今日の復旧事業、ボランティア活動にご尽力をいただいた功労者に対し、関中部森林管理局長(当時)から感謝状が贈呈されました。

感謝状については、個人では、災害当時の王滝村長の家高卓郎氏に、国有林関係では、陣頭指揮を取られた、元王滝営林署長の青木勇一郎氏、元長野営林局監査官の田中豊氏に、復旧工事の施工に携わられた青木耕栄氏(木曾土建(株))、奥田幸徳氏(奥田工業(株))、宮下公信氏(吉沢組(株))の6名の方に贈られています。

また、団体でも、植林ボランティアで活躍された中日親友隊、長期間林業体験という形で森林づくりに参加いただいた愛知県立阿久比高校の2団体に感謝状が贈られました。



表彰状を渡す関中部森林管理局長



団体として表彰を受けた中日森友隊

木曾森林環境保全ふれあいセンターの活動



木曾駒ヶ岳における植生復元作業(H17)



上下流交流をはかるイベント(H17)

中部森林管理局では、自然再生、森林環境教育、NPO支援等を主な目的とした木曾森林環境保全ふれあいセンターを、平成16年4月長野県木曾郡木曾町に設立しました。

同センターでは、王滝村の国有林を管理する木曾森林管理署などと協力して、長野県西部地震被災地におけるボランティア活動への支援を行う一方、自然再生活動の一環として、「国民の森」一帯における植生・土壌等の現況調査や今後の森林整備の進め方に関する検討も行っています。

また、その他にも木曾地域の教職員を対象とした研修会の実施、木曾川の上下流住民の交流を促進するための森林体験イベントの実施、地元NPOと連携した活動拠点の整備、中央アルプス木曾駒ヶ岳登山道周辺における高山植物群落の保護育成など様々な活動を行っています。

これらの活動を通じて、様々な人が森林とふれあい、森林で暮らす動植物への理解を深め、さらにはそれが地球環境の保全へとつながっていくよう今後も頑張っていきたいと考えています。



国土を守る森林をめざして・・・



中部森林管理局 木曽森林環境保全ふれあいセンター

〒399-6101 長野県木曽郡木曽町日義4905-2

TEL 0264-23-1080

FAX 0264-23-1081

E-mail : kiso-fureai@rinya.maff.go.jp

【協力】

木曽森林管理署、王滝村、(独)水資源機構、中日森友隊、名古屋シニアライオンズクラブ、愛知県立阿久比高校、王滝村立王滝小学校、刈谷市立かりがね小学校